

江戸川乱歩旧蔵資料にみる探偵作家クラブの出発

——「レヴュー殺人事件」脚本と乱歩直筆原案を調査する

米 山 大 樹

一 「レヴュー殺人事件」について

『アサヒグラフ』（一九四七・二・五）が「探偵小説家告知板」として、江戸川乱歩、延原謙、大下宇陀児、木々高太郎、海野十三、角田喜久雄、水谷準、城昌幸、大倉燐子の写真を紹介したことを受けて、江戸川乱歩は『探偵小説四十年』のなかで、「このグラビヤにのせられたのが、そのころ公認の現役探偵作家といつてよい人々であった。横溝正史君はまだ岡山の疎開先から帰京していなかったのであらう」と述懐している。このような把握は当時の一般的な認識に近いと考えられる。しかし、この「公認の現役探偵作家」九名のうち延原謙と大倉燐子を除いた七名が原案

に名を連ねる舞台が、一九四七年に上演されていたことはあまり知られていない。それは新風シヨウによる大衆演劇「レヴュー殺人事件」である。

この「レヴュー殺人事件」の浅草松竹座公演について、『探偵クラブ会報』第一号（一九四七・六）と探偵小説雑誌『真珠』（一九四七・九）に発表されたR・K生なる匿名の劇評²が、あらすじを次のようにまとめている。

レヴュー小屋で矢継早に五人の人間が殺される。松竹座そのものが舞台となり開演中に先づコンダクターが射殺され、或は照明掛のボックスから短剣が飛んで踊り子を刺し、或はマヂック・ボックスの扉を開くとプリマドンナの死体がコロがり出ると云つた工合。その

間に絶えず無気味な嘲笑がひゞき、緋色のカーテンの蔭から手が出て探偵の首を絞めようとしたり、その手を掴むとプチ切られた生腕だつたり……。これに支配人と女優と二枚目の三角関係を絡ませ、明智大五郎とか称する迷探偵の一组がギャグを綴る。最後に支配が真犯人として客席で逮捕され、舞台上で大立廻りとなるが、すべては「宣伝」のカラクリだつたといふ落ち。

レビュー上演中の舞台上で実行される連続殺人事件が実は宣伝であつたという筋は、観客を巻き込む仕掛けとなつていようだ。この劇評では、あらすじの紹介に続けて「かう書いて来ると一寸面白さうだが、その実チツトモ面白くない」として、次のように劇の内容を酷評している。

所詮は当節流行のエロを売物に一昔前のグロ趣味を加へた「レビュー」であり、割切れぬこの生ぬるさは、到底看板通りに、本格物の、スリルがどうのと批評出来る代物ではない。原案として大作家連の名前が並べてあるし、殊に今や探偵小説興隆の大切な時期に勿体ないことだと思ふ「略」探偵小説の成長も結局は社会大衆の基盤に立つものである以上、本格的な面白さを披露する絶好の機会を逸してはならない。附言するが、薄暗い「奈落」の場面では一応の「気分」は出てゐた。

ラストのピストルが玩具でありながら実弾が装填してあるといふのも想ひ附だ。「新風シヨウ」としては力を入れたものかも知れぬが、結局唯一の収穫が、衰へたりとは云へ淡谷のり子の「セントルイス・ブルース」だとは何んとも淋しい限りである。

ここで批判されているように、上演されたレビューは乱歩たち探偵作家にとって不本意な出来であつたのかもしれない。以降、「レビュー殺人事件」に関してメディアで言及されることはほとんどなかった。しかし、江戸川乱歩の旧蔵資料である立教大学江戸川乱歩記念大衆文化研究センター寄託資料及び所蔵資料の調査から、同作の原案は探偵作家クラブとしての事実上最初の活動であり、その謝礼が出発を支える資金となつていたことが分かった。さらに、乱歩は、原案は仕事を持ちかけたであろう加賀四郎ら大映と探偵作家たちの間に入って連絡を取り、自身は五つの原案を残すなど、かなりの熱量をもつてこの仕事に携わつていたようだ。

第二次世界大戦後の乱歩の活動について、山前譲は次のように解説している。

たとえ戦争という空白があつたといつても、やはり乱歩は探偵小説界を代表する作家だった。雑誌への寄稿

は相次ぎ、著書も次々と刊行されていく。戦前とは違って人付き合いも厭わず、かつてないほど周囲の賑やかな時代を迎えた。けれど、新しい小説が発表されたわけではない。執筆活動の中心は研究・評論であり、旧作が様々な形で出版されていたのである。

豊島区池袋の邸宅に集った探偵作家たちと土曜会を開催し、それを前身として発足した探偵作家クラブの初代会長となった乱歩は、新作小説をほとんど発表しないままに⁴探偵小説作家たちの中心人物となっていた。この時期の乱歩と、探偵作家クラブの活動について考える上で、「レヴュー殺人事件」の原案は看過することのできない重要な文芸営為である。

本稿では、「レヴュー殺人事件」と江戸川乱歩との関わりから探偵作家クラブの発足期について考察するために、以下の立教大学江戸川乱歩記念大衆文化研究センター寄託資料6点、所蔵資料2点の翻刻と検討をする。

【大衆文化研究センター寄託資料】

- ・『貼雑年譜』第四巻
- ・「レヴュー殺人事件」脚本
- ・「上演された自作脚本」紙映
- ・「探偵作家クラブ収支控」

- ・「受領証控 昭和21年11月9日～22年7月9日」
- ・「発書簡控 昭和22年1月29日～2月25日」
- ・【大衆文化研究センター所蔵資料】
- ・「昭和二十一年初 貸本控帖」
- ・「Diary 1947」

二 「レヴュー殺人事件」脚本

まず、『貼雑年譜』第四巻【図表1】に貼られた切り抜きから、「レヴュー殺人事件」の興行の概要を確認し、これを江戸川乱歩旧蔵脚本の記述と照合していく。

『タ刊新大阪』（一九四七・三・一四）の記事によれば、梅田映画劇場の次回公演として三月一八日から二週間にわたり上演されたという。また同紙面の広告では、「戦慄の実演」、「グランド・スリラー」、「未だ嘗てなかつた怪事件／レヴューの華麗と探偵劇の猟奇趣味を盛つた凄い演出！／怪異の技法に場内を恐怖に巻き込む」といった煽りとともに、「原案は当代一の探偵作家」として、七人の探偵作家の名を紹介し、「レヴュー殺人事件」の上演を宣伝している。これらの記事と広告から、「レヴュー殺人事件」が以下のスタッフと出演者らによって制作・上演されたことが分かる。



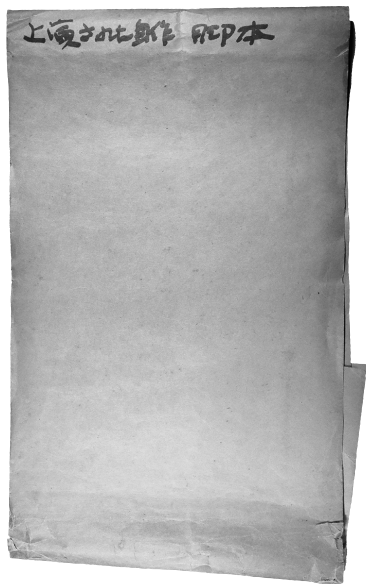
【図表1】『貼雑年譜』第四巻

- ・ 原案 江戸川乱歩、大下宇陀児、海野十三、角田喜久雄、水谷準、木々高太郎、城昌幸
 - ・ 脚本 斎藤豊吉
 - ・ 構成 山本紫郎
 - ・ 演出 穂積純太郎
 - ・ 音楽 服部良一
 - ・ 出演・演奏 淡谷のり子、逢初夢子、川路龍子、風見章子、伴淳三郎、藤尾淳、岡本八重子、岡本文子、武智豊子、サハラマリ舞踊団、松旭斎信子、松旭斎敏子、大山秀雄楽団、伊地知スキングバンド、東宝スキングオーケストラ
- また『読売新聞』（一九四七・五・二二、朝刊）の広告には、新風シヨウの浅草進出初公演として「恐怖と謎のグラインドスリラー」という煽りとともに松竹座での「レヴュー殺人事件」上演の広告が掲載されている。
- 江戸川乱歩旧蔵「レヴュー殺人事件」脚本は、「上演された自作脚本」と直筆で書かれた紙帙【図表2】に、以下の資料と共に保存されていた。
- ・ 「残されたる一人」脚本、直筆稿、耽綺社作、一九二七
 - ・ 「陰獣」脚本、直筆稿、新橋、一九三二
 - ・ 小納戸容「陰獣」脚本、『おろふいる』（一九三三・九

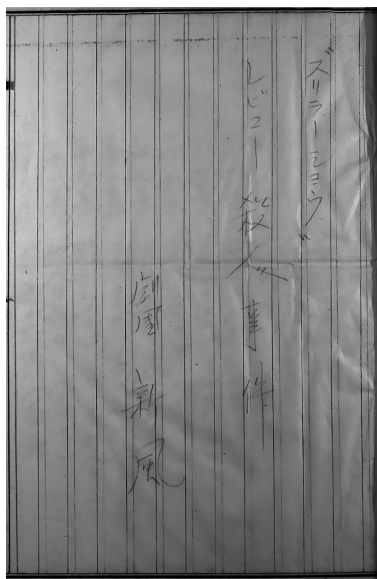
（一）切り抜き

・「陰獣」脚本、大阪角屋、一九三四

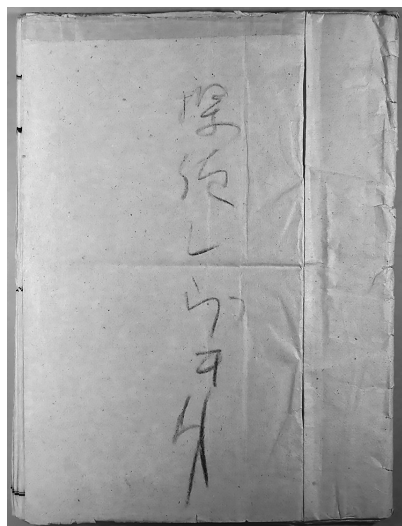
この乱歩旧蔵「レヴュー殺人事件」脚本は複写用紙〔縦罫二六行、二つ折り〕五一枚に書かれ、藁半紙の表紙によって装本されている【図表3-1】。原稿の筆跡は誰のものか不明であるが、表紙に書かれた「探偵レヴエウ」の文字は乱歩の直筆であると考えられる。原稿の一丁表【図表3-2】には、「スリラーショウ」／「レビュー殺人事件／劇団新風」と書かれており、二丁表裏【図表3-3、4】には「場割」の一覧が書かれている。これに続く三丁表からを本稿では本文とする。二丁には「No.1」、五丁から二三丁には「No.5」か



【図表2】「上演された自作脚本」紙帙



【図表3-2】「レヴュー殺人事件」脚本、
1丁表



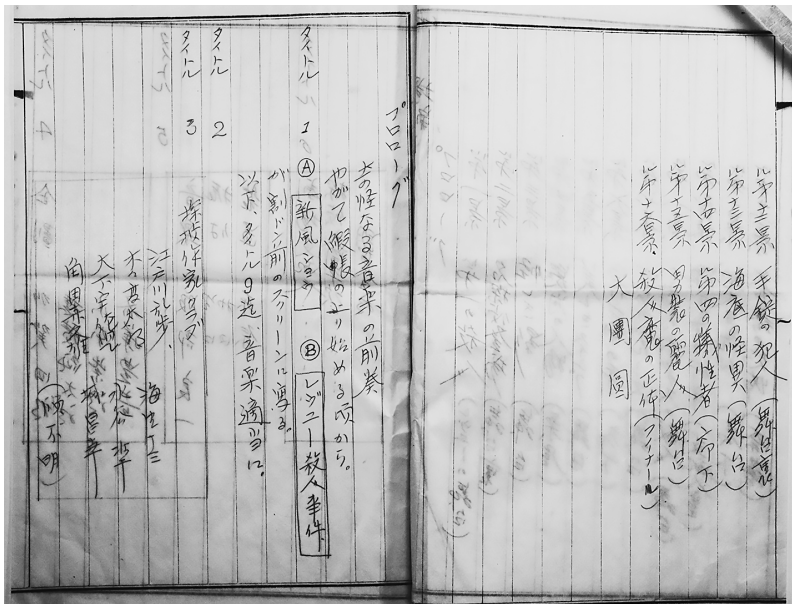
【図表3-1】「レヴュー殺人事件」脚本、
表紙



【図表3-3】「レヴュー殺人事件」脚本、2丁表

ら「No.20」、二五丁から二九丁には「27」から「31」、三一丁から四九丁には「33」から「51」と、それぞれ各葉の右上欄外に番号が振られている。最後の五〇丁は白紙である。二丁表裏の「場割」一覧は、本文に書かれているものといくつかの相違点【図表4】が見られる。

プロローグでは、「奇怪なる音楽の前奏」から始まり、「やがて緞帳の上り始める頃から」/タイトル 1 ①新風シヨウ ②レヴュー殺人事件／が割ドン前のスクリーンに写り、「タイトル9」まで順にクレジット・タイトルが投影されていく。



【図表3-4】「レヴュー殺人事件」脚本、2丁裏-3丁表

【図表4】「レビュー殺人事件」脚本、場割

二丁表裏「場割」		本文		本文の開始丁数	欄外の番号
プロローグ		「同上」		三丁表	
第一景 第一の殺人（レビューの舞台）		「同上」		四丁裏	
第二景 名探偵登場（舞台裏）		「同上」		六丁表	No 3
第三景 怪しき影（舞台）		「同上」		一一丁表	No 8
第四景 疑問の人物（楽屋）		「同上」		一二丁表	No 9
第五景 美しいスイング（舞台）		「同上」		一七丁裏	No 14
第六景 白い二つの手（廊下）		「同上」		一八丁表	No 15
第七景 呪ひのブルース（舞台）		「同上」		二〇丁表	No 17
第八景 魔法の箱の殺人（舞台）		「同上」		二二丁表	No 19
第九景 踊り子の行方（支配人室）		第九景 陽気なリズム（舞台）		二三丁表	No 20
第十景 犯人は誰だ？（廊下）		第十景 踊り子の行方（支配人室）		二五丁表	
第十一景 奈落の恐怖（奈落）		第十景 犯人は誰だ？（廊下）		三〇丁表	③⑩
第十二景 手錠の犯人（舞台裏）		「同上」		三二丁裏	
第十三景 海底の怪異（舞台）		「同上」		三七丁裏	③⑦
第十四景 第四の犠牲者（廊下）		「同上」		三八丁裏	③⑧
第十五景 男装の麗人（舞台）		「同上」		四〇丁裏	④④
第十六景 殺人魔の正体（フィナーレ）		「同上」		四六丁裏	④⑥
大団円		第十七景 殺人鬼の正体（舞台）		四七丁表	④⑦
		大団円		五一丁表	⑤①

「タイトル6」から「タイトル9」には登場人物の役名が書かれているものの、その下の出演者が書かれるはずの場所には「……」とのみ書かれている【図表3-5】。二人の探偵役の名前は、「大岡政談」の講談などのモデルとして知られる大岡忠相と野村胡堂『銭形平次捕物控』シリーズの銭形平次の名前とを組み合わせた大岡平次に、江戸川乱歩の小説の名探偵・明智小五郎をもじった明智大五郎。この二人の探偵役には、新風ショウの喜劇俳優である伴淳三郎と藤尾淳が配役されていたのではないかと。特別出演となっている「歌手」役は、劇評にもあるように淡谷のり子が演じたようだ。前述の『夕刊新大阪』（一九四七・三・一四）では、他に逢初

<p>タイトル 4</p> <p>合 則</p> <p>加賀四郎 穂積純太郎 小糸紫江 若原豊子</p>	<p>タイトル 5</p> <p>音楽 堀江 順部良一 若原 芳彦</p> <p>探偵作家クラブ 探偵作家クラブ 探偵作家クラブ</p>	<p>タイトル 7</p> <p>探偵作家クラブ 探偵作家クラブ 探偵作家クラブ</p> <p>探偵作家クラブ 探偵作家クラブ 探偵作家クラブ</p>	<p>タイトル 8</p> <p>歌子 探偵作家クラブ 探偵作家クラブ</p> <p>探偵作家クラブ 探偵作家クラブ 探偵作家クラブ</p>
--	--	---	--

【図表 3-5】 3丁裏-4丁表

夢子、川路龍子、風見章子、岡本八重子、岡本文子、武智豊子ら女性俳優の出演を確認することができた。彼女たちやサハラマリ舞踊団のダンサーが、「女優 篠原愛子」「篠原莞子」「掃除婦 かめ」「踊り子 峯とん子」「英子」「かほる」「マリ子」、特別出演の「踊り子 瀬川はるみ」といった女性登場人物の配役に起用されたことが推測できる。

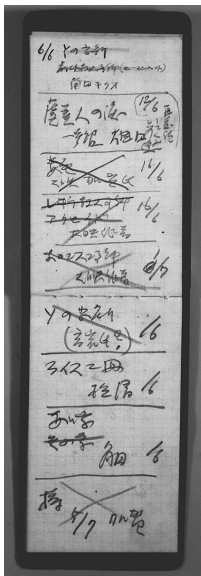
『貼雑年譜』第四巻の切り抜きには紹介されていなかった情報として、特に注目すべきは、「タイトル3」に「探偵作家クラブ」の団体名が書かれていることと、「タイトル4」に「企画」として「加賀四郎」の名前が書かれていることだ。

江戸川乱歩は『探偵小説四十年』で、探偵作家クラブの正式な設立は一九四七年六月、『探偵作家クラブ会報』第一号の発行と同時期であるとした上で、同年五月二十九日の探偵クラブによる警視庁見学についての報道を引用し、「これらの新聞記事で、探偵作家クラブは発足前から、世間にその存在を紹介されたわけであった」と書いている。『貼雑年譜』第四巻には、さらに前月の「久しく沈黙を守っていた江戸川乱歩氏をはじめ大下宇陀児、木々高太郎、横溝正史、延原謙、保篠竜緒氏らを中心に推理小説の作家、翻訳家が多数集つて『探偵作家クラブ』を結成した」（『時事新報』

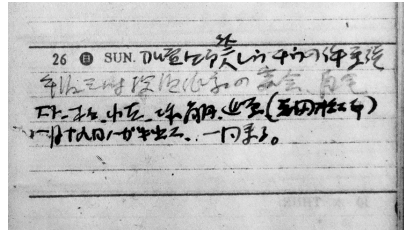
一九四七・四・二」といった記事が貼付されている。しかし、「レヴュー殺人事件」の上演開始はこれらの新聞記事よりも早い同年三月一八日である。上演までにこの脚本からの変更があったかもしれないが、もし脚本通りのクレジット・タイトルがスクリーンに映されたのならば、探偵作家クラブの名を世間に示した事例としてかなり早いものと言える。

また、加賀四郎は江戸川乱歩の小説「心理試験」を原作とした映画「パレットナイフの殺人」（一九四六・一〇・一五公開）を企画した大映のプロデューサーである。『探偵小説四十年』に抜粋された当時の日記によれば、加賀四郎と「パレットナイフの殺人」の脚本家・高岩肇らは、一九四六年五月二五日から数回にわたって乱歩邸宅を訪れて、映画化について相談していたという。同年七月一日の日記には「加賀四郎プロデューサーは異常な熱心さで、原作者の助言を求め、ある場合は弁当持ちでやってきたほどである。原作者として、こういう相談を持ちかけられたことは、あとにも先にも、このほかにはなかった」という注が付けられている。一九四六年に乱歩が使用していた手帳の一つに、「昭和二十一年初 貸本控帖」と書かれたものがある。そこには「大映 加賀氏」や「大映 作家」というメモが残さ

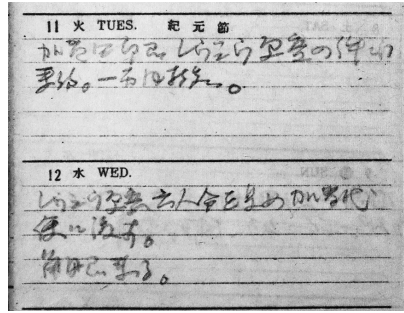
れており、乱歩は、加賀四郎らに助言をしていただけではなく、F・W・クロフツ『樽』などの海外ミステリー小説を紹介し、蔵書から貸し出していたことが分かる。この「昭和二十一年初 貸本控帖」のなかに六月一六日の日付で「レキウ殺人事件／アクロイド／大映作家」と書かれたメモがある【図表5】。立教大学図書館所蔵の乱歩旧蔵書に「レキウ殺人事件」に該当する書籍を確認することはできなかったが、このような「パレットナイフの殺人」制作時の交流が「レヴュー殺人事件」の企画へと繋がっていた可能性が考えられる。また一九四七年に使用していた手帳「Diary 1947」には、一月二六日に「加賀四郎外二人レヴキウの件受託」とあり【図表6-1】、この日に乱歩は加賀四郎らから直接「レヴュー殺人事件」の原案を頼まれたことが分かる。さらに、二月一日には「加賀四郎君レヴキウ原案の件に



【図表5】「昭和二十一年初 貸本控帖」



【図表 6-1】「Diary 1947」 1月26日



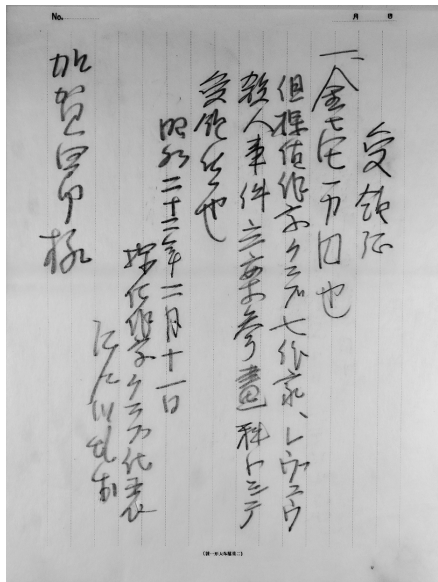
【図表 6-2】「Diary 1947」 2月11日、12日

て来訪。一万円持参」、翌一二日には「レヴユウ原案六人分を集め加賀氏使に渡す」とあるように【図表 6-1-2】、乱歩にとって「レヴユウ殺人事件」の原案は、新風シヨウとの仕事というよりも、加賀四郎との関係性から引き受けたものであったようだ。

三 探偵作家クラブとしての最初の収入

やつ「Diary 1947」には二月一日に加賀四郎が一万円を持参したとあり、この収入は「受領証控 昭和21年11月

9日」22年7月9日」【図表7】にも「金壺万円也／但探偵作家クラブ七作家、レヴユウ殺人事件立案参画料トシテ受領仕候也／昭和二十二年二月十一日／探偵作家クラブ代表／江戸川乱歩／加賀四郎様」という受領書の写しが記録されている。『探偵小説四十年』で「昭和二十二年には、小説は一つも書いてないが、随筆評論は、かぞえてみると四十九篇〔略〕私としては、やっぱり大いに書きまくった感じである」『著書が三十一冊出版されている。むろん、旧作ばかりだが、これも私にとってはレコードである』⁶と述懐して



【図表 7】「受領証控 昭和21年11月9日～22年7月9日」

いる江戸川乱歩自身にとって、この金額はさほど重要ではなかったかもしれない。しかし、他の作家との連名で得たこの資金は、探偵作家クラブにとって大きな意味を持っていた。「レヴュー殺人事件」の原案は、実質的に探偵作家クラブの活動であり、その収益は探偵作家クラブが始動する足掛かりとなったのだ。「探偵作家クラブ収支控」【図表8】には、一九四七年二月に「レヴュー殺人事件（新風シヨウ）考案料（角田、木々、大下、海野、城、水谷、江戸川）寄附」で得た一万円が組織の最初の収入として記入されている。これと翌三月に乱歩が寄付した一万円によって事務費や人件費がまかなわれ、探偵作家クラブ発足の準備が進められていた。

まだ正式には発足していなかった探偵作家クラブが、「レヴュー殺人事件」の原案にどのように携わっていたのか、複写簿を用いて残されている乱歩の発信した書簡の控えから知ることができる。「発書簡控 昭和22年1月29日〜2月25日」は、欄外右下に江戸川乱歩の名が印刷された、マスキンの上部分に大きな空白がある原稿用紙（一七文字×一〇行）が束ねられた複写簿である。ここに記録されている書簡に記号を振り、宛先（書簡以外は内容）・日付・枚数をリスト【図表9】として整理した。

探偵作家クラブ収支控					
昭和22年 月日	摘要	収入	支出	残高	
2/2	レヴュー殺人事件(新風シヨウ)考案料(角田、木々、大下、海野、城、水谷、江戸川)寄附	10,000			
3/3	江戸川 寄附				
3/8	土曜会茶菓料不足分		45		
3/8	同夕会クラブ支出分(島本泰)三人分(東洋軒)		845		
3/20	事務費 渡辺辰彦		1,000		
3/24	同事務費給付科(3月26日付)		700		
3/24	真珠社長寄附	100			
3/28	本会所高柳義彦代		500		
4/5	本会所渡辺辰彦		1,000		
4/12	土曜会茶菓料不足分(島本泰、島本泰、島本泰)より支拂		3,987		
4/19	給付科同人		850		
4/24	本会費 渡辺辰彦		1,000		
5/17	土曜会茶菓料不足分		180		
5/17	同夕会三人分(島本泰、島本泰、島本泰)より支拂		1,134		
5/17	大下海野見表寄附	5,000			
5/26	給付科同人		850		
5/28	本会費 渡辺辰彦		1,000		

【図表8】「探偵作家クラブ収支控」

これらの乱歩発書簡には、土曜会及び探偵作家クラブについての連絡や、乱歩が構成補導を担当した横溝正史原作の大映映画「蝶々殺人事件」に関わる内容などが書かれている。本稿では「レヴュー殺人事件」の共同原案者に宛て

[illegible]

1	中村正弘（天城二）	1月29日	6	
2	※土曜会題目表	2月2日	1	
3	坂輔男	2月4日	3	
4	横溝正史	2月4日	1	
5	新日本社	2月4日	1	
6	木々高太郎	2月4日	3	
7	大下大兄（大下宇陀兄）	2月8日	5	
8	※「レヴュー殺人事件」原案	2月11日	15	
9	西田政治	2月12日	4	
10	海野十三	2月12日	2	
11	渡辺芳夫	2月12日	3	
12	森下雨村	2月12日	8	
13	小酒井久枝	2月15日	2	
14	講談社書籍部長 鈴木久雄	2月15日	2	
15	横溝正史	2月15日	3	
16	高岩肇	2月16日	2	
17	かもめ書房 熊谷	2月17日	2	
18	『アサヒグラフ』編集部	2月17日	1	
19	『タイム』係	2月18日	1	
20	鳳書房	2月18日	1	
21	横溝大兄（横溝正史）	2月18日	2	
22	上田光雄	2月19日	2	
23	岡田英尔	2月22日	2	
24	高見順	2月20日	2	
25	岡戸武平	2月26日	3	
26	井上英三	2月25日	2	

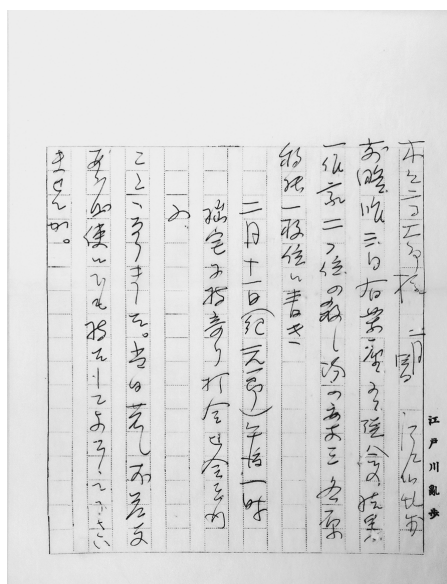
【図表10】と海野十三宛書簡（一九四七・二・一二、書簡番10）

〔書簡番号6〕

前略昨三日有樂座にて談合の結果一作家二つ位の殺し場の案を各原稿紙一枚位に書き

二月十一日（紀元節）午後一時

拙宅に持寄り打合せ会を行ふ



99

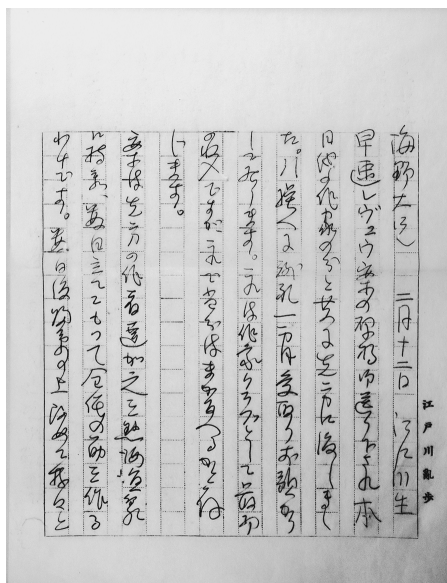
ことゝなりました。当日若しお差支あらば使にでも持たしてよこして下さいませんか。

殺しの案は、各歌手が得意の歌を歌ひ終つてから、奇抜な方法で殺されるといふわけにて、その場面等も殺しに都合よきものを考案してよろしいわけです。犯人は影等で現はすのみにて、終りに凡て嘘であつたといふ種あかしになるのですから、本当の犯人は無いわけです。探偵は二人組のコメディ男優。天勝の手品、アクロバット等使用出来ます。レヴューの全体の筋は殺し場の案を受取つた後先方で仕組み、出来上つてからもう一度我々作家と打合せをするといふ順序です。ですから最初は自由に案を出してよろしいわけです。考案及名前を出す謝礼として一同に一万円と申出ておきました。先方は相談して二兩日中に■答する由ですが、若し不調となりましたら電報しますが、大体通るものとして御考案おき下さい。やつぱり会つて話さないとよく分らない点もあるので十一日はなるべく御来駕を乞ふ。

〔書簡番号10〕

海野大兄 二月十二日 江戸川生

草々



【図表11】海野十三宛書簡（1947年2月12日）、1枚目

早速レヴュー案の原稿御送り下され本日他の作家の分と共に先方に渡しました。引換へに謝礼一万円受取りお預かりしております。これは作家クラブとして最初の収入ですが、これで当分はまかなへるかと存じます。案は先方の作者達が之を熱海温泉に持寄、数日立てこもつて全体の筋を作るわけです。数日後帰京の上改めて我々と最後の打合せを行ふわけです。貴兄は出席はむつかしいと存じますから、その決定は小生らに御任せおき下さる様願ひます。いづれその結果等御報告い

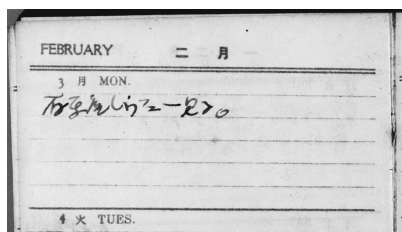
たします。御礼のみ

草々

御大切に。

この二通の乱歩発書簡からは、加賀四郎らから「レヴュー殺人事件」原案をもち掛けられた乱歩が他の共同原案者にとどのような依頼内容を伝え、とり纏めていたのかをうかがい知ることができる。おそらく乱歩は、大下宇陀児、海野十三、角田喜久雄、水谷準、木々高太郎、城昌幸らそれぞれに書簡または口頭で同様の連絡をしていただろう。木々高太郎宛書簡（書簡番号6）に「昨三日有楽座にて談合」とあるが、「Diary 1947」には

二月三日に「有楽座レヴュー見る」とあり【図表6-3】、実際にレヴュー・ショーを観劇した上で、話し合いを設けていたことが分かる。また、海野十三宛書簡（書簡番号10）の「引換へに謝礼一万円受取りお預かりしております。これは作家クラブとして最初の収入ですが、これで当分はまかなへるかと存じます」



【図表6-3】「Diary 1947」2月3日

という記述から、乱歩が「レヴュー殺人事件」の原案を探偵作家クラブとしての最初の収入と考えており、それによって探偵作家クラブの発足期の活動資金をまかなっていたことは明白である。

木々高太郎宛書簡（書簡番号6）にあるように、二月一日の話し合い以前の段階では、「各歌手が得意の歌を歌ひ終つてから、奇抜な方法で殺される」、「犯人は影等で現はすのみにて、終りに凡て嘘であつたといふ種あかしになる」というプロットと「探偵は二人組のコメディ男優。天勝の手品、アクロバット等使用出来ます」という大まかなキャスティングのみが決められていて、その「奇抜な方法」が同時代を代表する探偵小説作家たちに託されていたようだ。「天勝」とは手品師である松旭齋天勝とその一座のことを差すが、前述の『夕刊新大阪』（一九四七・三・一四）に掲載されていた広告には出演者として天勝一座の手品師である松旭齋信子と松旭齋敏子の名前がある。

完成された脚本では歌手だけではなく、指揮者や女優、ダンサーといったレヴュー・ショーの様々な出演者が殺されていくように変更されていたことが、劇評や乱歩旧蔵脚本の内容から確認できる。海野十三宛書簡（書簡番号10）に「先方の作者達が之を熱海温泉に持寄、数日立てこもつ

て全体の筋を作る」とあるが、探偵小説作家たちから集めた原案をレビュー・ショーの形態にまとめあげるという非常に困難に思える仕事に、脚本担当の斎藤豊吉、構成担当の山本紫郎、演出担当の穂積純太郎らの手腕が発揮されていたのだろう。

四 「レビュー殺人事件」 乱歩直筆原案

立教大学江戸川乱歩記念大衆文化研究センターに寄託されている江戸川乱歩発書簡控のなかには、原稿や草稿、構想メモが部分的に記されている資料を確認することができ、「発書簡控 昭和22年1月29日～2月25日」には、「レビューの殺人のレビューの案／二月十一日夜案／明十二日加賀氏使に渡す」として、乱歩直筆の「A案」から「E案」まで五つの原案が一五枚にわたって記録されていることが判明した。木々高太郎宛書簡（書簡番号6）で「一作家二つ位の殺し場の案を各原稿紙一枚位に書き」と指定していたことを考えれば、五つの案、そしてマス目の上部分に大きな空白がある原稿用紙（一七文字×一〇行）のマス目からはみ出しつつ書かれた一五枚という分量は、作家の熱意を証明するのに十分であろう。では、舞台脚本への乱歩の

関心のありかを検討するため、江戸川乱歩の「レビュー殺人事件」原案（書簡番号8）全文を翻刻する。

【書簡番号8、一枚目【図表12-1】】

A案「巨人の短剣」

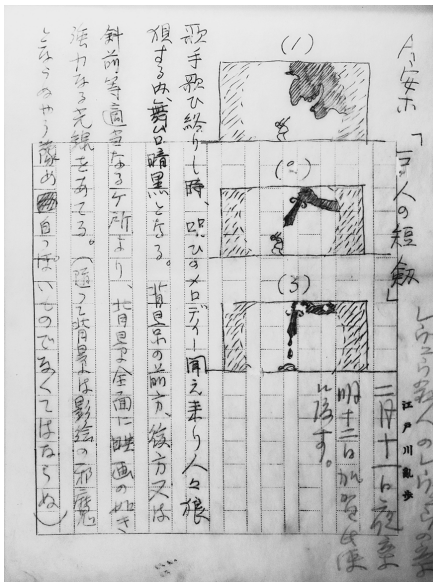
レビューの殺人のレビューの案

（1）※「悪魔の巨大な横顔ともげる歌手のイラスト」

（2）※「短剣を掴んだ腕が歌手を追うイラスト」（3）

※「歌手を刺し殺した短剣から血が滴るイラスト」

二月十一日夜案



【図表12-1】「レビュー殺人事件」乱歩原案、1枚目

明十二日加賀氏使に渡す。

歌手歌ひ終りし時、呪ひのメロディ聞え来り人々狼狽する内、舞台暗黒となる。背景の前方、後方又は斜前等適當なるヶ所より、背景全面に映画の如き強力なる光線をあてる。(随つて背景は影絵の邪魔とならぬやう豫め白つばいものでなくてはならぬ)

〔書簡番号8、二枚目〕

その背景一杯に悪魔の横顔現はれ、歌手を一呑みにせん有様にて、ラウドスピーカーにより、「ウエヘヘヘ、、、、」と恐ろしく大きな笑ひ声を聞かせる。

歌手舞台を逃げまどふ内、顔の影引込み、次に恐ろしげなる短剣を掴みたる手首現はれ、剣の先にて歌手を追ひ廻す。歌手遂に悲鳴と共に舞台中央に倒れる。その上から短剣の影が刺し■〔通?〕す。その短剣が引き抜かれると、剣の先よりポトリ／＼と血潮の巨大な影がしたたつてゐる。再び悪魔の笑ひ声。これにて舞台明るくなり、あと騒ぎよろしくあり。

〔書簡番号8、三枚目〕

B案「暗中誘拐」

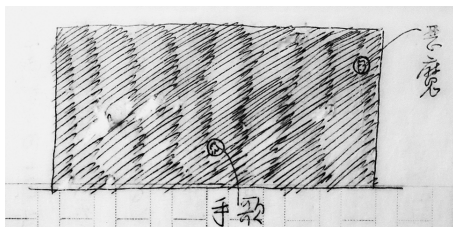
※〔悪魔と歌手の位置を示すイラスト【図表12-2】〕

歌ひ終り、呪ひのメロディと共に舞台暗黒となる。

歌手中央に立ちすくんでゐる。その顔だけを照らす小さな強いスポットライトを当てる。恐怖の表情。間もあらせず舞台一方の隅(出来るなら■〔ば?〕小高き所)に今一つのスポットライトを当てる。その中に無表情の仮面(仮面の如きメークアップにてもよろし)の人物の顔が現はれ、暫くの間歌手

〔書簡番号8、四枚目〕

とジッと睨み合つてゐる。音楽その他何等の音なく、たゞジッと睨み合つてゐる。全暗黒の中に小さな顔が二つだけ浮出してゐる恐怖。やがて悪魔の顔ライトと共に歌手に近づき来る。徐々に、徐々に。歌手は蛇に見込まれた蛙のやうに動けない。そして顔が一尺ほどに近づくと、そこで掴み合ひが行はれる心持。二つの顔だけがいろ／＼に動くのみで、からだは少しも見え



【図表12-2】「レヴュー殺人事件」乱歩原案、3枚目イラスト

ない。そして結局悪魔は歌手を小脇に抱へて舞台外へ去る。この時も二つの顔だけにスポットライトが当たつてゐるやうに移動させる。尾を引く長き悲鳴。直ちに舞台明るくなり、騒ぎよろしくあるべし。

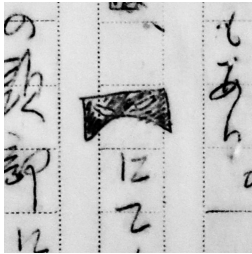
〔書簡番号8、五枚目〕

（変化）右の悪魔の顔を舞台の両側より一つづつ現し、或は更らに中央後方より合計三つ現すなどの方法もあり。仮面でなくて、※〔マスクのイラスト【図表12-3】にてもよろし。又目かくしせるメフィスト・フェレスの頭部にてもよろし。併し、周囲が暗黒故顔面は明るき色の方よろしきかと考へ、無表情の仮面とせるなり。

〔書簡番号8、六枚目〕

Ｃ案「消え行く歌手」（暗黒魔術応用）

（方法）背景を黒一色とし、登場人物の衣裳及小道具は凡て白つばきものとする。登場人物の背後を全身黒衣の人々が自由に動き廻つても客席からは少しも見えないやうな電気装置にする。黒衣の



【図表12-3】「レヴェー殺
人事件」乱歩原案、5枚目
イラスト

人々手にて小道具を宙に動せば、小道具ひとりで宙に漂ふが如くに見える。

（演技）呪ひのメロディーと共に種々の楽器が楽師の手を離れ宙を飛び歩き。をかしみの恐怖あり。次に中央黒の背景近くに立ちて歌へる歌手の片足が無くなる。（黒布にて覆へばその効果が出る。奇

〔書簡番号8、七枚目〕

術師承知なり）歌手は一本足で、手足をうちふりながら歌ひつゞける。次に一本の足も消える。胴から上だけで身振りしながら歌ひつゞける。次に胴が消える。首と両手だけで歌ひつゞける。両手も一本づつ消えて、遂に顔だけが宙に浮いて歌つてゐるが、長き悲鳴或は悪魔の笑ひ声と共に顔も消えて、皆無になつてしまふ。この時楽師達は楽器を放り出したまゝ逃げ去つてしまつてゐる。そこへ彼らの知らせによつて二人の珍探偵が震ひながら登場、楽器がひとりで宙を飛び、それ

〔書簡番号8、八枚目〕

にぶつかつて尻餅をつくなどのをかしみあり。やがて探偵の帽子（一人をシャーロック・ホームズ風に仕立てるとすれば、例の古風な大鳥打帽）がひとりで宙に舞ひ上つたり、大きなつけ髭がはづれて顔の前を漂ひ

ながら逃げ出し、それを追つかけるなどの滑稽あり。
又探偵兩人銀色に光る大ピストル手にしてゐるとせば、
このピストルが同じく宙を漂ふなど様々工夫あるべし。
(変化) 歌手の手足が消えて行くのをやめて、歌手の背
後より長さ三尺もあるやうな

〔書簡番号8、九枚目〕

巨大な注射器が現はれ、これが宙を漂つて先づ楽師達
を一人づゝ毒薬注射にて倒し最後に歌手に注射して倒
すといふ案もあり。この場合は珍探偵はピストル片手
に巨大な注射器を追つかけるをかしみとなる。

〔書簡番号8、一〇枚目〕

D案、「歌手煎餅となる」

舞台、酒場。スタンドあり、バーテンダーも登場する
オペレットじみたる舞台。一方に巨大なるビール樽あ
り。(高さ五六尺、直径三尺ほどのほり、こ)

色々芝居ありある後、例の呪ひのメロディー聞え。
大樽ひとりで動き出し、横倒しとなり、ゴロ／＼と舞
台中央へ転がつて来る。アツといふ間に、歌つてゐた
歌手おし倒され、樽の下敷きとなる。樽がころがり去
つたあとに歌手の姿が見えぬ。

珍探偵登場、床より樽におしつぶされた歌手をつかみ

上げる。歌手は煎餅のやうに平べつたくなつてゐる。
布又は厚紙に歌手の姿を描ける

〔書簡番号8、一一枚目〕

もの。探偵がこれを高く掲げて見せた後、あきれ返つ
て手をはなすと、歌手の平べつたい姿はクナクナとく
づれて行く。

このメカニズムは明瞭には云へませんが、舞台のセリ
出し穴を利用し、歌手は樽の下敷きになりながら、穴
から下へ姿をかくし、平べつたい絵を残しておくとい
ふことは出来ませんか。或は樽をその際縦にころがし、
(舞台前方より奥に向かつてころがし)

客席から見れば、下敷きとなる歌手は樽の背後に隠れる
やうにして、その間に吹き変へるといふ方法もありさ
うです。

〔書簡番号8、一二枚目〕

(其他) 奇術応用の方法は天勝の所持する大道具の種類
によつて、出来るのもあり出来ないのもあるので、こ
の次の打合せ会是天勝一座の人にも来て貰つて奇術利
用の案を向ふからも出して貰つて見ては如何ですか。
案外面白い工夫があるかも知れない。

〔書簡番号8、一三枚目〕

江戸川追加

（既述A、B、C案は真の暗黒を要するを以て、客席背後より光線の入るおそれある昼間興行にはむづかしいのではないかと気づいたので今一つ別案を附加へます。E案「キングとジャック」

背景を一面の洋室の壁となし、正面、両袖に六個以上の大トランプの額又は壁模様が並んでゐる。トランプは凡てキング、クエーン、ジャック等、人物のある札にて、その人物は等身大。

この背景の前にて歌手歌ひ終り、例のメロディー聞え、トランプの一つの人物（ジャック）がトランプの面を抜け出し舞台上に降り立つ。抜け出した

〔書簡番号8、一四枚目〕

あとにはジャックの形そのまゝ黒い穴が残る。（トランプには上下二人の人物が胴でつながつて描いてあるが、抜け出したあとには下部の人物は消して上部の人物の全身の抜け穴にする。このトリックは最初は絵にて、その絵がはづれてうしろに落ち、同じ服装の人物が変つて飛び出すか。最初から上半身は本物にしておくか。いづれでもよろし）

抜け出したジャックは剣をかざして歌手にせまる。歌手悲鳴を上げて舞台一方に逃げる。するとその行手のトランプからキングが抜け出して前に立ちふさがり、同じ剣で斬らうとする。尚もう一人ぐらゐ抜け出させてもよろし。それよ

〔書簡番号8、一五枚目〕

り追駆けとなり、最後に歌手キングとジャックの為に刺し殺される。

殺してしまふとキングもジャックも元のトランプに帰り動かなくなる。

右に基き珍探偵の出し方工夫すべし。

尚、このトランプの代りに種々のポーズの等身大人物の絵の額にしてもよろし。又更らに石膏や大理石に見まがふ裸体像を二三ヶ所に建ておき、この彫像が動き出して歌手に迫るといふ手を併せ用ゐるも一法なり。

ここに書かれた五つの案は全て、舞台という制約的な空間を念頭に、トリックによつて怪奇を演出したものである。天勝一座が出演することをすでに知っていた乱歩は、犯罪行為を隠蔽するトリックで探偵を欺くのではなく、舞台手品のトリックによつて観客を驚嘆させる構想を練つていた。そして、今まさに観客の見ている舞台上でアクシデントが

起きつつもショーが続行されるような白々しいリアリティではなく、影絵の巨人を登場させるA案に代表される超自然的な怪奇の演出を考案した。それは、横山泰子『妖怪手品の時代』（青弓社、二〇一二・四）が「化け物や妖怪出現などの怪異現象を、種や仕掛けによって人為的に作り出す娯楽」と定義し、乱歩の文芸をその系譜に位置付けた「妖怪手品」とも共通する。横山は「妖怪手品は、怪奇的な要素（妖怪にあたる）と仕掛けの要素（手品にあたる）の両面を持っている。この両方を乱歩は愛していたのである」と指摘しているが、怪奇とそれを作り出す仕掛けが書かれたこの「レビュー殺人事件」原案は、乱歩によって夢想された妖怪手品ショーのラインナップとも言える。

B案では「全暗黒の中に小さな顔が二つだけ浮出してゐる恐怖」、C案では「呪ひのメロディーと共に種々の楽器が楽師の手を離れ宙を飛び歩き。をかしみの恐怖あり」とあり、ある部分だけが暗闇の中で浮遊するような様子を乱歩が「恐怖」として好んでいたことが分かる。特に、C案における「歌手は一本足で、手足をうちふりながら歌ひつゞける。次に一本の足も消える。胴から上だけで身振りしながら歌ひつゞける。次に胴が消える。首と両手だけで歌ひつゞける。両手も一本づゝ消えて、遂に顔だけが宙に浮い

て歌つてゐるが、長き悲鳴或は悪魔の笑ひ声と共に顔も消えて、皆無になつてしまふ」という身体部分が徐々に消えていく様子や、「歌手の手足が消えて行くのをやめて、歌手の背後より長さ三尺もあるやうな巨大な注射器が現はれ、これが宙を漂つて先づ楽師達を一人づゝ毒薬注射にて倒し最後に歌手に注射して倒す」という非合理で悪夢のような光景には、現実的な殺人事件を仮構したスリルの提供とは明らかに異なる効果が企図されている。また、一三枚目に「既述A、B、C案は真の暗黒を要するを以て、客席背後より光線の入るおそれある昼間興行にはむづかしいのではないかと気づいた」とあるように、前半三つの案は明暗を区別する視覚をライティングの効果によって錯誤させる奇術となつてゐる。これに対し、樽の下敷きとなつた歌手を「布又は厚紙に歌手の姿を描けるもの」で表現して「歌手の平べつたい姿はクナクナとくづれて行く」というD案と、巨大なトランプから絵柄の人物が抜け出すE案では、舞台の奥行きを利用し、立体と平面とを区別する視覚を混乱させる手法がとられている。

五 乱歩原案と脚本との比較

乱歩が五つ用意した「レヴュー殺人事件」の原案は、上演された脚本にどう反映されているのだろうか。

乱歩原案にあった奇術を用いた歌手殺害の演出は、脚本では「第三景 怪しき影（舞台）」と「第八景 魔法の箱の殺人（舞台）」に分散されて反映されていると考えられる。「レヴュー殺人事件」の舞台上には、アクシデントに巻き込まれる劇中劇から、その舞台裏の楽屋や奈落までが再現される。乱歩原案が反映されているのは、女性歌手や奇術師が舞台上上がり、客席に向けてパフォーマンスを繰り広げるシーンである。

最後に、脚本からこの「第三景 怪しき影（舞台）」、「第七景 呪ひのブルース」、「第八景 魔法の箱の殺人（舞台）」を翻刻し、乱歩原案と比較する。

〔一二丁表二〇行目～一二丁表五行目〕

第三景 怪しき影（舞台）

音楽、それに影で何かの背景

女のA歌手が出て歌ふ（歌詞挿入）

間奏になつて、歌手が後ろにさがる。と、何かの影であつたものが、悪魔の如き両手の型となり、

歌手の首をしめやうとする。

その瞬間、歌手前に出て、再び歌ふ。手の影消える。第二の間奏、歌手再び、マイクを離れて後になる。何処となく、セントルイスブルースが聴え始める。と——さつきの怪しい手が、今度は短剣を握り振り上げる、あつそその危機一髪の時、歌手Aは歩き出す。歌、そして歌の終るに連れて、退場する。（歌と一緒にセントルイスブルースは消えること。）

残つた手の影の短剣から、一滴、二滴したゝり落ちるのは、色あらば血汐であらうか、

怪しい声 へ、へ、へ、へ。やがて第二の血を流してやるぞ。へ、へ、へ、へ。

不気味な笑ひ声と共に影は消える。

〔一二丁表五行目～二四丁表三行目〕

第八景 魔法の箱の殺人（舞台）

割ドン前

奇術師が登場、種々不思議な奇術を展開する。

（音楽）

割ドン開くと、黒い箱が二ツ置かれてある。マヂックボックスである。奇術師、二つの箱を開けて観

客に中の空であることを示す。一方の箱に美しい助手を入れて、錠をかける。

奇術師 只今、皆様の目の前でこの箱に入れましたる

美人が巧く向ふの箱に移りましたら、ごかつさいの程

——一、二、三——

(ピストルをうつ)

そして、その箱の錠をあけて、箱をあける、中は空になつてゐる。

奇術 「はーつ」

と一声、別の箱を開ける。

中から前景の女歌手が、血汐にそまつて、くたくくと倒れ来てくる。

「あつ」と驚ろく奇術の前に崩れる様に床へ伏す。

奇術師 (大声で呼びかける) あつ、誰か来て、大変ですく

どこからともなくセントルイスブルースの曲が聞え、それにWつて無気味な笑ひ声。そして、

怪しい声 第二の犠牲者——(笑ひ声)

二人の探偵、飛ぶ様に出てくる。

明智 畜生、たうく又やりやがつた。

大岡 うーむ、残念。

明智 (袖に向つてどなる) おーい、誰かたんかを持つて来い。

二人、周章で、女歌手を介抱する。

進行係がたんかを持つて来る。

傍のテーブルの上にのせる。

二人の探偵、女歌手を担いで、たんかに乗せて、白布をかける。

明智 (うろたへる奇術を制して) これも奇術の様な顔をしてレヴューを続行しろ。観客に覺らせてはいけな

いぞ。続けろく

奇術師 猶もおろくしてゐる。

その傍へ行き活を入れる。

そして、二人、たんかをかついで行かうとする。

大岡 おーい、軽いぞ。

明智 うん。軽い。おかしいぞ。

二人、行きかけたのを戻して、白布を取る、と、女歌手の姿は消えてゐない。

「アッ」と驚ろく二人、怪しい笑声。

セントルイスブルースの曲が猶も無気味に続いてゐる。

割とんしまる。

第一景でコンダクターが射殺されながらも、第二景では支配人によってレヴュー・ショーの続行が宣言される。第二景の最後で「舞台上に紗が降りる」というト書きがあり、第三景では紗が降ろされた舞台上で音楽と女性歌手が影と演じるパントマイムだけが披露された後、怪しい声が「へ、へ、へ、へ、やがて第二の血を流してやるぞ。へ、へ、へ、へ」と響く。全体を通して異色の演出であり、ストーリーに関係するというよりは、イメージのみを表現しているようである。巨大な手と短剣、そこから滴る血のような影絵は、乱歩原案のA案に書いたイラストと符合する。しかし、殺人行為が完遂するシーンとはなっていない。その実行は、第八景で奇術師が空の箱に助手を移動させる手品の後、さらにその助手と女性歌手の遺体が入れ替わるという形で演じられる。ここでも入れ替わる奇術が活用されているが、乱歩原案にあったような、明暗や興行きの錯視を利用したものとはなっていない。

かなりの熱意で原案に携わったはずの乱歩がその後メディアで「レヴュー殺人事件」に触れることがなかったのは、期待が大きかった反動でもあっただろう。「レヴュー殺人事件」の結末、レヴュー劇団の宣伝に利用されていたことを知った大岡平次と明智大五郎は「ウーンと二人仲良くその

まゝクタ／＼と舞台上に伸びかけ」て茫然自失とするが、フィナーレの音楽が鳴れば「探偵二人も一同に交つて、唄つて踊つて」と、彼らもまた共演者であることを示す。しかし、乱歩をはじめとする探偵小説作家たちはこの二人の探偵のように振る舞うことはせず、口を閉ざした。あるいは、『探偵作家クラブ会報』第一号（一九四七・六）と『真珠』（一九四七・九）に掲載されたR・K生なる匿名批評家の後ろには、乱歩や木々高太郎、海野十三、大下宇陀児、角田喜久雄、水谷準、城昌幸ら複数の失望が混ざりあった真顔が控えているかもしれない。しかし、この原案が探偵作家クラブにとって初めての収入を得た活動であったことは事実だ。「レヴュー殺人事件」に関する乱歩旧蔵資料の調査からは、第二次世界大戦後、探偵小説作家たちが再出発していく痕跡を以上のように確認することができた。

【注】

1 江戸川乱歩『江戸川乱歩全集第29巻 探偵小説四十年（下）』（光文社文庫、二〇〇六・二）

2 R・K生「浅草松竹座の『レヴュー殺人事件』」（『探偵クラブ会報』一九四七・六）とR・K生「浅草松竹座の『レヴュー殺人事件』」（『真珠』一九四七・九）には共通する表現が多く見られるため、同一の評者がまず『探偵クラブ会報』に発表し、加筆修正した

ものを『真珠』に改めて発表したものだと考え、本稿では『真珠』版から引用する。

3 山前譲「道楽の集大成」(『江戸川乱歩全集第26巻 幻影城』二〇〇三・一一)

4 第二次世界大戦終戦後から「青銅の魔人」(『少年』一九四九・一〇一二)までの新作小説として、「江戸川乱歩作品と著書年度別目録(下)」(『江戸川乱歩全集第29巻 探偵小説四十年(下)』光文社文庫、二〇〇六・二)では「犯人は婆さんか」(『サンデー毎日』一九四七・七・六)のみを「堀崎捜査一課長出題の犯人あて解答を小説風に書いたもの」として挙げている。また、これを非小説に分類する『江戸川乱歩リファレンスブック2 江戸川乱歩執筆年譜』(名古屋市立図書館、一九九八・三)では「知恵の一太郎」シリーズの未発表作品「ゴムまりとミシン針」(『魔法の眼鏡』一九四七・一二)のみを挙げている。

5 この「レキウ殺人事件」には、Madelon St. Dennis『The Mystery of the Golden Pirates』が当つはまるだろうか。延原謙による邦訳「レキウ殺人事件」が掲載された『探偵小説』(一九三二・三)は立教大学図書館所蔵江戸川乱歩旧蔵資料にあるものの、単行本『レキウ殺人事件』(延原謙訳、黒白書房、一九三六)及び原著を乱歩旧蔵書に確認することは出来なかった。

6 江戸川乱歩『江戸川乱歩全集第29巻 探偵小説四十年(下)』(光文社文庫、二〇〇六・二)。同書は、新保博久による注釈で「この種の数字は、例によって厳密に正確ではない」として訂正している。

〔凡例〕

・本稿における引用文及び翻刻文では、漢字の表記は原則として新字体に改め、ルビは適宜省略した。引用文中の傍点、傍線部は、特に注記のない限り原文のままである。また、□は稿者による注釈を示し、／は改行を示す。

・翻刻文では、直筆資料の判読できない文字は■で表記し、イラストなど文字以外の表現は※で表記した。また、繙読しやすさを考慮し、挿入部分は該当箇所に加え、ミセケチや字下げ、一行空白などは省略し、句読点及び改行を適宜省略又は追加した。

(立教大学日本学研究所)